

る。一見すると、川のようなである。しかし、れっきとした湖であり、その証拠に近くには更に細長い「ネス川 (River Ness)」がある。ネス湖を隅から隅まで味わうのにはクルーズ船のツアーに参加するのが一番だそうで、私もツアーに参加し、船でネス湖を旅した。「運よくネッシーに出会えるかも (笑)。」と思い、カメラ片手に風がビュービュー吹く甲板に出てネス湖を眺めることにする。船は、森に囲まれた湖をただひたすら走り続ける。周りは目を引くような建物はほとんどなく、船は自然あふれる森の合間を進み続ける。しかしこの「何もない」自然そのものの風景が、なぜか心を落ち着かせるのである。

自然を満喫するクルージングの旅を始めて1時間ほど過ぎたころ、船の先に何やら建物が見えてきた。「アーカート城 (Urquhart Castle)」である。写真を見てお分かりのように、ネス湖に浮かぶアーカート城は形容する言葉が見当たらないほど美しいのであるが、船が近づいていくと、城が少し変わった形をしているのに気づく。城が原形をとどめておらず、朽ち果てているのである。1230年に建てられたこのアーカート城は風化して朽ち果てたのではなく、1296年にエドワード1世率いるイングランド軍に包囲されて破壊されたとのこと。何となく物悲しい廃城が、なぜかネス湖の風景に素晴らしくマッチするのである。もしかしたら、この廃城と湖の風景がネッシー伝説に一役買っているのかもしれない。

このアーカート城がツアーの終着点である。船から降りてアーカート城を散策した。石造りのこの城は大部分壊されているが、残った部分からアーカート城がいかに大きく頑丈な城だったかが分かる。保存状態が一番よい「グラント・タワー (Grant Tower)」に登り、高いところからネス湖を見てネッシーを探す。ネッシーは機嫌が悪かったのか、東洋からのお客に挨拶をしに出てきてくれなかった。

ネス湖畔だけではなく、インヴァネスの町全体が、都会の喧騒を忘れさせてくれる、のどかなところであった。ロンドンからは少し遠いが、イギ

リスに行くことがあれば、ぜひインヴァネスまで足を延ばして、雄大な自然を満喫していただきたい。インヴァネスでは美味しい料理にも出会うことができたが、それについては、またの機会にレポートしたいと思う。

D.H. ロレンスの自然観： 短編小説『太陽』に関して

経営学部
山田 晶子

ロレンス (D.H. Lawrence 1885-1930) の短編小説『太陽』(The Sun 1928) は、彼の後期の作品である。主人公はジュリエットという既婚の女性であり、大都会で強いストレスにさらされて、療養のためにイタリアへ行くことになった。そこで大自然に囲まれて癒されて心身を回復させていく物語であるが、この作品では、特に、太陽の象徴的な力が大きく関わっていて、太陽はあたかも男性であるかのごとく描写されている。

『世界シンボル大事典』によると、「太陽」は、
① 肯定的な意味では光と熱と生命の源泉であるが、熱帯地方では乾燥を引き起こすので破壊の根源ともなる、とある。しかし、ロレンスの『太陽』という短編小説では肯定的な意味で使用されており、人間を蘇らせる命の源であり、神である。
② 月との対比で考えると、太陽の「陽」に対し、月は太陽の光を反射して光るので、「陰」である。ゆえに太陽は「能動的原理」であり、月は「受動的原理」と言える。

③ 西洋では、太陽は「男性」の原理であるが、日本や南ヴェトナムの山岳民族では、太陽が「女性」であり月が「男性」と考えられている。ロレ

ンスの「太陽」では太陽は男性を表している。

次に、ロレンスの『太陽』における文体・主題の特徴を考えてみよう。

- ① 植物が非常にたくさん登場している。これらの植物には象徴的な意味を持っているものがある。ブドウ、オリーブ（「平和」の意味）、レモン、オジギソウ、ウチワサボテン、イトスギ（「再生」の意味）、オレンジ、クロッカス、スイセン、アーモンド（「真理」、「宝」の意味）、アネモネ（「生命のはかなさ」、「豊かさ」と過剰」の意味）、ハス（「誕生と再生の永遠を保証する原型的な女陰」の意味）、「バラ色」から連想されるバラの花、イナゴマメ、カタバミ、スマイレ色から連想されるスマイレ、イチゴ、ユリ等。また、ジュリエットの子宮は、しばしば「ハスの花」に喩えられている。
- ② 動物がかなり登場している。特に注目すべきは「蛇」である。そしてイタリアで本来の自分に戻ったジュリエットと子供のジュリーは、動物に喩えられることが多い。動物とは、本能的な存在である。肯定的な比喩としては「蛇のようにサッと彼に飛びついた」、「わたしは、山猫と同じだった」という表現があり、「太陽に身をさらしたことがないミミズと同じ大人」、「墓場のうじ虫」、「貝殻のなかに隠れたカタツムリに似て、恐怖の小さなやわらかい核を持っていた」等が上げられる。
- ③ 都会に生きている男性（ジュリエットの夫のモーリス）とイタリアの農夫（ジュリエットが恋心を抱いた男）が対比されている。農夫が光の国の男性であるのに対比して、モーリスは「灰色」に包まれた男性として書かれている。
- ④ 太陽がジュリエットの恋人として描かれている。ゆえに生きている男性としての太陽の特徴が色の変化によって表され、太陽の個性が描かれている。通常の「赤い」太陽ではない。たとえば、「青い光をまとった太陽」、「どのような愛よりも温めてくれる太陽」が「自分のなかに入ってくるのを思い描いていた」、「太陽は、時には、赤みがかって、大きな、人見知りする動

物を思わせた」、「緊張した彼女の子宮は、今もまだ閉じたままだったが、太陽が神秘的に彼女を愛撫するにつれて、ゆっくりと、ゆっくりと開いてゆくのであった。」一方、最初の頃、ジュリエットの幼い子供の目に表われていた恐怖心は「太陽への恐怖心」と呼ばれ、今日の全ての男たちの目の中心にあると書かれている。

- ⑤ 旧約聖書に書かれている「エデンの園」という楽園神話に、部分的になぞらえられる物語である。

現代のニューヨークで機械的な生活、夫との戦いに疲れたジュリエットは精神を病んでおり、医者に「日に当たるとよい」と言われて、南イタリアへ療養に出かける。そこで太陽を浴びることによって彼女は本来の、裸の自分を取り戻す。太陽が「裸である」と書かれており、これが何を意味するかを考えると、それはジュリエットにも形だけの裸から、真の自分に戻るための裸を得るようにと促す太陽の姿であったことが分かる。彼女は、論理的に考えたり頭で物事を判断する現代人を離れて、ただ「女」として生きることになったのである。

「エデンの園」では、アダムとイブは裸のまままで恥ずかしいとは思っていなかった。しかし神に背いて罪びとになってから裸であることを恥ずかしいと考えるようになったのであった。ジュリエットの場合は、この逆で、ニューヨークでは服に束縛された「罪人」として生きていたのだが、イタリアへ来てから服を脱いだのであり、そのことを恥ずかしいと感じなかった。つまり彼女は一種の「楽園」へ入ったのである。ゆえにそこは花が咲き乱れており、蛇のような怖い動物もいるが彼女は怖がらなかった。人間と動物が対等に生きていたのがエデンの園だったのである。

そしてアダムとイブは蛇に誘惑されて知恵の木の実を食べて楽園を追われた。一方、ジュリエットは蛇を見かけたが、蛇は彼女を誘惑することなく姿を消す。

このように、『太陽』という短編は、エデン

の園の神話を逆に扱っていると言って良い。そして彼女もまた「楽園」を去らなければならない。それは彼女が現代に生きているゆえの宿命なのであり、ここに『太陽』のリアリズムがある。また、彼女は心を惹かれる農夫とは交わることはできない。当時は農夫の身分は、ジュリエットやモーリスの中産階級とは異なって身分が低い、と考えられていた。農夫の方から彼女に近づくことは常識的に考えられないし、彼女もまた身分階級に囚われている。それを破ることは犯罪に等しいと思われるのだ。21世紀の現代とは違い、ロレンスの生きていた時代においてはそうであった。

最終的にはモーリスとまた夫婦関係を持つとしても、ジュリエットは一時的にせよ、「太陽」を恋人として生き、その化身とも思われる農夫に出会ったことによって、心身がかなり再生したと思われる。

『太陽』という小説では、現代人は完全に「楽園」に帰ることは出来ないのである、という悲劇を呈示していると考えられる。そして聖書からの引用があり、聖書の枠組が感じられることや、イタリアが舞台になっておりギリシア・ローマ神話に登場する「ペルセウス」という人物が書かれていたりすることから分かるように、ロレンスの作品には、「太陽」に限らず、神話的な要素が非常に多く入っている。

ロレンスの神話の世界では、現代の男女が古代の自意識に縛られていない生き方を求めて悩みまどい、花、木、鳥、獣、月、太陽、風、星、大地、火などの自然界と関わることによって人生を模索する様が感動的に描かれているのである。そしてロレンスにとっては、人間が正常な状態を獲得する上で、このような大自然との交感が欠くべからざるものであったのである。

注：本原稿は、2007年度に筆者が担当した科目「英文小説購読」の春学期の講義ノートの一部に加筆したものである。

参照：ジャン・シュヴァリエ、アラン・ゲールブラン共著

金光仁三郎・熊沢一衛・小井戸光彦・白井泰隆他訳
『世界シンボル大事典』（大修館書店、1996）

語彙と聴解について —その個人的アプローチ—

名古屋語学教育研究室
服部 茂

『語研ニュース（第17号）』にて、精読のすすめとして読む学習法について述べた。今回は、その続編として語彙と聴解について述べてみたい。

どの言語学習においても語彙力は不可欠である。語彙力がなければ、聴けない、話せない、読めない、書けない。したがって、学習者にとって語彙力、つまり単語、熟語は最も大きな課題である。しかも、問題なのは、どう効率的に必要な語彙を必要数記憶するかである。その記憶法を工夫している人もいれば、記憶に苦手意識をもつ人もいるだろう。いずれにせよ、若い時期に語彙力を身につけなければ、その後の英語学習に大きく影響を及ぼすので遅くても、大学1、2年生までにはまとまった必要数の語彙力を身につけたい。

単語などの記憶法には個人差がありそれぞれ自分流のプロセスがあるので、一概にそれを提示することはできない。自分に合った方法を見つけることが先決である。だから、私一個人の記憶法が学生諸君に合うかどうかかわからないが、私が行なった方法について反省（カッコ内で言及）を込めながら述べてみる。

私は高2の夏休みに、単語（約2000）、熟語（約1000）の単語帳を買いその夏中すべてその記憶に努めた。当時、英語は語彙力だと思い込みひたすら覚えまくった。そのやり方は、単・熟別で1